

# 『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の構造

——唐糸の物語を中心に——

ホン ソンジュン  
洪 晟準

『頼豪阿闍梨怪鼠伝』は、曲亭馬琴の史伝物読本の第二作であり、文化五年の正月に前編五卷五冊が、同年十月に後編三卷四冊が続いて刊行された。馬琴は『近世物之本江戸作者部類』（天保五年）に、文化五年十一月に大阪で本作品を脚色した歌舞伎が興行されたことを記している<sup>①</sup>。大阪で歌舞伎化されるほどの人気を得た本作品は、美妙水冠者義高<sup>②</sup>が頼豪阿闍梨の怨念による鼠の術を使って源頼朝への復讐に挑むという内容である。

『怪鼠伝』の作品構造に関しては、石川秀巳氏の論考があり<sup>③</sup>、そこで氏は、源頼朝像と木曾義仲像を分析し、本作品から窺える馬琴の史実と虚構の用い方を通して彼の歴史意識の検討を行った。そして、本作品が大きく「〈挫折する刺客〉の物語」と「〈猫鼠の対立〉の物語」の二つの物語から成っていると述べ、前者は、頼朝への敵討ちを成功させることのできない、挫折する義高を描く物語であり、後者は、頼豪阿闍梨の登場に伴って、猫と鼠の対立を描く物語であると指摘している。このうち、前者の物語では、義高の敵討ちと光実の敵討ちが相互に絡み合う、二重の敵討ち物語を見出すことができると指摘している。

『怪鼠伝』には、主人公義高をはじめ、頼豪阿闍梨、木曾義仲、源頼朝、猫間中納言光隆、猫間新太郎光実、石田太郎為久、宇野小太郎行氏など、歴史上の人物が主要人物として登場する。馬琴は作中の随所で、先行する〈軍記も

の〉の故実に自ら脚色を加えたということを明確に述べている<sup>④</sup>。こうした主要人物等を巡る一連の出来事は、史実を基盤に虚構を加える手法で書かれたと考えられる。もちろん、これを馬琴だけが用いた手法とは言い難いが、これら进行分析することで、創作における馬琴の独創的な工夫を見出すことは可能であろう。

本稿では、『怪鼠伝』の主要人物のうち、主人公義高の周辺人物の中でも物語の展開に欠かせない存在である唐糸という人物に注目をする。本作品を義高や頼豪阿闍梨の視点から読むのではなく、唐糸を中心に読むことで、義高の孝が中心であった物語が、唐糸の忠と貞の側面も持っているということを指摘する。

## 二

『怪鼠伝』における唐糸は、美妙水冠者義高の乳母として登場し、手塚太郎光盛の妻でありながら、今井四郎兼平の妹でもある。歴史上の人物と深い関わりを持つ唐糸は、実は『平家物語』、『増鏡』、『吾妻鏡』などの歴史書には登場しない。しかし、唐糸は完全に馬琴の創作した人物とは言えない。それは渋川版御伽草子二十三編のうちの一つである『唐糸草紙』（室町期成立）や森島中良の読本『風草紙』（寛政四年刊）のように、唐糸という人物を巡る物語は馬琴以前から既にあったからである。また、鎌倉に入った唐糸が閉じ込められた土牢といわれる「唐糸やぐら」（神奈川県鎌倉市釈迦堂ヶ谷所在）のように、唐糸にまつわる現実の場所も存在している。

本稿で主人公義高やその父である義仲、敵である頼朝といった中心的人物ではなく、殊更唐糸という人物に注目するのは、馬琴の同時代作者である一楊軒玉山と為永春水の『怪鼠伝』評がきっかけである。

『怪鼠伝』の発刊から五年後、玉山の『<sup>まいり</sup>出像／<sup>よみほん</sup>稗史<sup>げだいからみ</sup>』外題鑑』（文化十年刊）という書物が刊行された。全八巻九冊におよぶ『怪鼠伝』をわずか二行に要約し、物語の主要場面を簡略に示している。

らいがう あじやりくわいそでん  
頼豪阿闍梨怪鼠伝 馬琴作／北斎画

義仲の公達よし高の孝と勇、烈女唐糸が苦肉の行、頼朝をねらひし事、  
大姫君の貞心、頼朝の仁智、西行が金猫、鼠の祠のものがたり。 九冊  
(一楊軒玉山『〈出像／稗史〉外題鑑』<sup>⑤</sup>)

\*傍線は筆者による。以下、同。

また、春水の『増補外題鑑』（天保九年刊）も『怪鼠伝』の項に解題を載せている。

らいがう あじやりくわいそでん  
頼豪阿闍梨怪鼠伝 前後十巻 著作堂馬琴作／葛飾北斎翁画

み い であ あじやりらいがう ねずみ きだん きそよしなみやこのぼ いんえん し  
三井寺の阿闍梨頼豪が鼠となりし奇談より、木曾義仲都登りの因縁、清  
みづ くはんじやよしとかねずみ じゆつ おこな きだん ねこましんたらう ふくしう しんく れつちよからいと  
水の冠者義高鼠の術を行ふの奇談、猫間新太郎の復讐の辛苦、烈女唐糸の  
ちうしん こゝん ひいで  
忠臣などと、古今に秀しものがたりなり。

(為永春水『増補外題鑑』)

以上、玉山と春水の『怪鼠伝』の解題を確認してみると、春水の『増補外題鑑』は玉山の『〈出像／稗史〉外題鑑』の増補版であるとはいっても、両者が解題に取り上げている内容は異なっていることが分かる。下線部「烈女唐糸が苦肉の行」（『〈出像／稗史〉外題鑑』）、「烈女唐糸の忠臣」（『増補外題鑑』）とあるように、唐糸は共通して「烈女唐糸」と称されている。また、両解題に共通して載せられている人物は、『怪鼠伝』の主人公義高と唐糸の二人だけであるため、この物語において唐糸を義高に並ぶ主要人物とする見方があったことが窺える。

また、唐糸に関して、馬琴の自作批評集である石水博物館蔵『著作堂旧作略自評摘要』（天保十五年、以下『略自評』と略称）でも言及されている。この自評集には各作品について馬琴の簡略な自評が載せられており、且つその評価も附されている。もっとも評価の低かった二作の一つが『怪鼠伝』である（も

う一つは『俊寛僧都嶋物語』)。

『略自評』上巻に取り上げられている作品の最初が『怪鼠伝』であり、最低評価をつけた理由として、物語が演劇的趣向によって成っていることや、「実録」(史書や軍記に記された史実)に拘束されて自由に筆が揮えなかったことを挙げている。またその他の理由として、馬琴は次のような例を挙げている。

況亦仮清水冠者の大太郎・宇野の小太郎夫婦及唐糸の如き、忠<sup>(ママ)</sup>信節婦数を尽して枉死の事は、当時の看官惨刻を歎ぶ故にはあれど、今にして是を思へば後悔なきにあらず。(中略)且唐糸は忠義の為に子を殺し女婿を殺し女兒を殺し彼身も節に死したれども、毫も功なかりしは憐むべし。

(『略自評』上巻「頼豪阿闍梨怪鼠伝」項<sup>⑥</sup>)

物語の中で義仲と義高に対する忠義を尽くしたにもかかわらず、唐糸は報われないまま、物語は終わってしまう。実際『怪鼠伝』では、土牢に押し込められていた唐糸が義高の呪文で現れた鼠らによって助けられるが、その後、義高が頼朝に捕らえられたことを知り、頼朝の娘大姫と共に自害する。この場面は、以下の重忠の言葉によって説明される。

おほひめぎみ　こう　てい　み　じ　かい　うせ　からいと　こと  
大姫君は、孝と貞とに身をおきかね、自害して失給ひしかば、唐糸も事の  
なら　みづからやいば　ふし　おほひめぎみ　くび　よし  
成ざるを見て、自刃に伏たり。さるによつて、大姫君のおん首級は、義  
たか　まほ　からいと　かうべ　みつぎね　おく　こ　ち　かは  
高ぬしへ進らし、唐糸が首は、光実ぬしへ贈り、その子をもて父に代らし、  
しん　きみ　か　かの　よじよう　くう　い　さし　いま  
その臣をもて君に換ふ。かゝれば彼豫譲が、空衣を刺たるに勝れり。今は  
たがひ　ふくしう　こゝろざし　たち  
送<sup>⑦</sup>に復讐の志を絶給へかし。

(『怪鼠伝』巻之八第十八套<sup>⑦</sup>)

確かに、馬琴の記したとおり、唐糸は物語の中で、義仲と義高への忠義のために息子大太郎を含む数人の周辺人物を犠牲にした。また、唐糸自身は土牢に押し込められ、物語の最後には自害するのである。唐糸は忠義のために犠牲と

なることに耐え忍んできたにもかかわらず、報われないまま物語は終わってしまうのであり、『略自評』における「毫も功なかりしは憐むべし」とは、このことを指しているのである。

しかし、上掲の下線部「その子をもて父に代らし、その臣をもてその君に換ふ」、<sup>いま</sup>「今は送ひに復讐の志を絶給へかし」を見ると、義高<sup>ちい</sup>に対し、敵の頼朝<sup>かは</sup>の代わりに娘の大姫の首を贈り、また光実<sup>しん</sup>に対し、敵の義仲の代わりに家臣の唐糸の首を贈ることで、この復讐劇を終わらせようとするのが書かれている。唐糸としては、主君義仲の身替わりになったのであって、これは臣として十分な功績ではないだろうか。この成り行きを目にした頼朝は、「光実<sup>みつぎね</sup>も又唐糸<sup>またからい</sup>が忠死<sup>ちうし</sup>に愛<sup>めで</sup>て、怨<sup>うらみ</sup>を散<sup>はら</sup>し給へかし」と言い、光実も唐糸の首をもって義高への敵討ちを遂げたことにするのである。

以上のことから、『怪鼠伝』の刊行から三十六年が過ぎて書かれた馬琴の自評に至って、唐糸を巡る馬琴の意識が変わったことが窺える。こうした意識の変化は『略自評』における馬琴の次の記述からも窺える。

就中怪鼠伝の一書は文化五年の旧作にて、当時の流行にや従ひけん、都て雑劇の趣を旨としたれば中へにわろし。

（『略自評』上巻「頼豪阿闍梨怪鼠伝」項）

このように、馬琴は文化五年当時の流行に従って浄瑠璃・歌舞伎の趣向を用いたことが悪いと、後年に至って述べている。

文化五年の『怪鼠伝』執筆当時では、作品の面白みは演劇的趣向（例えば、真の義高を登場させる身替わりの趣向や両眼を繰り出す景清伝説等）を用いた創作であったと考えられるが、天保十五年に至っては、唐糸の節義に対して、死後何の榮譽も与えられなかったことを自ら低く評価しているのである。

『略自評』には、上掲の箇所他に、唐糸について言及した箇所がもう一ヶ

所ある。

又意ふに右の論中浅間が為に死する者、富士右門并に其妻三雲・右門が女児小雪一名浪路・村主兵介・兵介女児浪江、是也。この四男女は忠貞孝義にして枉死しぬるは勤懲に害あるに似たれども、皆己ことを得ざる所ありて、各その死あり。こゝをもて死して其忠貞孝義の名、いよ／＼芳しかるべし。怪鼠伝なる唐糸以下数人、嶋物語なる鶴前以下数人の如き、死して後栄なき者と非<sup>(ママ)</sup>を同くして論ずべからず。

(『略自評』上巻「三国一夜物語」項)

『三国一夜物語』(文化三年刊)において浅間のために死んだ四人の男女は、『怪鼠伝』の唐糸と『嶋物語』の鶴前、そしてその他数人のような、死後に栄誉が与えられなかった者と同一視してはならないという意味である。

『嶋物語』の鶴前は、父である俊寛に会うため、鬼界島に向かいたいと思うが、蟻王の次の言葉を聞いて向かうのをやめる。

ひめぎみ なげ ことわり すぎ  
姫君のおん歎きは、理にも過たれど、ゆくべきをゆかずして、思ひとゞま  
り給ふは、是<sup>これこう</sup>孝なり。且<sup>かつうし</sup>牛若丸<sup>わかまる</sup>の事、日来は明白<sup>こと</sup>に、いひも出給はねど、  
したは けしき はいごぜ すい  
慕しくおぼする気色は、母御前も猜し給ひて、いと痛しとて安良子<sup>いたま</sup>には、  
のたま こと たゞゆる とき まち えに つき さい  
宣はせし事も候ひき、只緩やかに時を待給へ、縁しだに竭給はずは、再  
くわい とき  
会の期なからんや。待わびしきを俟給ふは、是<sup>これてい</sup>貞なり。

(『嶋物語』巻之四第九套<sup>⑧</sup>)

下線部のように、蟻王は鶴前に俊寛のところへ行かないことが「孝」であり、また「貞」であると言う。この言葉を聞いた鶴前は、結局船から飛び降り、タコに食べられて亡くなってしまう。この場面は、読者に対しては劇的な印象を与える怪異的演出であったかもしれないが、鶴前にとっては「孝」と「貞」のた

めに俊寛に会いに行くことを思い留まった挙げ句の最期である。おそらくこの箇所をもって、馬琴は『略自評』における「死して後栄なき者と非を同くして論ずべからず」の一文を記したのであろう。「死して後栄なき者」とは、唐糸や鶴前のような人物を指しており、この箇所を通して馬琴が『怪鼠伝』と『嶋物語』を低く評価した原因が窺える。

### 三

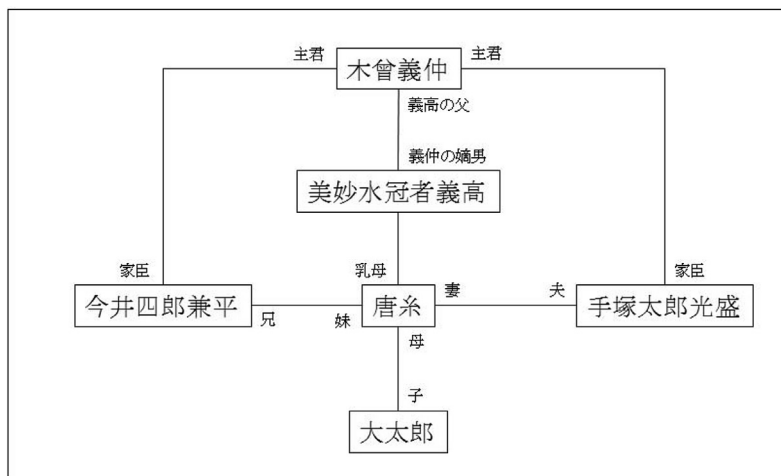
『怪鼠伝』の敵討ちは大きく義高の敵討ち物語と正忠と光実の敵討ち物語の二つから構成されていると先に述べたが<sup>⑨</sup>、その二つの敵討ち物語について簡略に記すと次のようである。

第一の敵討ち物語は、義仲の敵頼朝に対する嫡男義高の復讐を描いた物語である。義仲が頼朝側の石田太郎為久の計略によって討たれたため（第三套）、義高はその敵討ちを誓う。その過程で義高は、頼豪阿闍梨の御霊から授かった鼠の術を使うことになるが、それは義仲が頼豪の神前に願書を納める場面がきっかけとなっている（第一套）。

第二の敵討ち物語は、猫間中納言光隆の敵義仲に対する家臣正忠・弟光実の復讐を描いた物語である。義仲の狼藉に恥辱を受けた光隆が自害し（第二套）、それに恨みを抱いた正忠・光実が義仲を討とうとするが、義仲が為久に討たれたため、代わりに義高を狙うことになる（第三套）<sup>⑩</sup>。

この二つの敵討ち物語は絡み合うことになり、結局、義高が頼朝を討つために身に付けた鼠の術を、光実の家宝である金の猫が解いてしまうという設定になっている。そして本稿で注目したいのは、これら二つの敵討ち物語とは別の、唐糸を中心としたもう一つの敵討ち物語である。

義高の乳母唐糸は、たくさんの人物と関わりを持っている。『怪鼠伝』における唐糸の人物関係を以下の図にまとめた。



『怪鼠伝』における唐糸の人物関係図

この図から分かるように、唐糸は『怪鼠伝』の義仲側の登場人物をつなぐ中心的人物であると言ってよい。そして、唐糸と関わりを持つ図の中の人物は、義高を除いて皆、頼朝側の武将らによって殺されることになる。次に唐糸の敵討ちについて述べられている箇所を引用する。

かの<sup>ち</sup> 彼地（鎌倉）に到<sup>いたつ</sup>て、君<sup>きみ</sup>（義高）を竊<sup>ぬす</sup>みだし奉<sup>たてまつ</sup>り、鎌倉を攻<sup>かま</sup>めおとして、亡<sup>せめ</sup>君<sup>ほうくん</sup>（義仲）の冤<sup>うらみ</sup>を雪<sup>きよ</sup>めばやと、明暮<sup>あけくれ</sup>肝胆<sup>かんたん</sup>を摧<sup>くだ</sup>き侍<sup>はべ</sup>れど、兄<sup>あに</sup>も夫<sup>を</sup>も討<sup>うち</sup>死<sup>じに</sup>して、粟津<sup>あはづ</sup>が原<sup>はら</sup>のあはれ世<sup>よ</sup>に、生<sup>いき</sup>残り<sup>のこ</sup>たる大太郎<sup>もの</sup>は、物<sup>もの</sup>の用<sup>もち</sup>にたつものならず。

（『怪鼠伝』巻之二第四套、※括弧、発表者註）

君<sup>きみ</sup>の仇<sup>あだ</sup>、兄<sup>あに</sup>夫<sup>おつと</sup>の仇<sup>あだ</sup>、今<sup>いま</sup>又<sup>また</sup>わが子<sup>こ</sup>大太郎<sup>だいちろう</sup>と棧橋<sup>かけはし</sup>夫婦<sup>ふうふ</sup>を失<sup>うし</sup>ひつるも、みな頼<sup>より</sup>朝<sup>あさ</sup>故<sup>ゆゑ</sup>なれば、縦<sup>たとひ</sup>十<sup>と</sup>重<sup>へ</sup>甘<sup>は</sup>重<sup>は</sup>の鉄壁<sup>てつぺき</sup>城<sup>じょう</sup>なりとも、近<sup>ほ</sup>よつて本意<sup>ほんい</sup>を遂<sup>とげ</sup>なん。

（『怪鼠伝』巻之二第五套）

かくてぞ唐糸<sup>からいと</sup>は、堀江<sup>ほりえ</sup>を撃<sup>うつ</sup>てわが児<sup>こ</sup>の仇<sup>あだ</sup>を報<sup>むく</sup>ひ、又<sup>また</sup>為久<sup>ためひさ</sup>を説伏<sup>ときふ</sup>せて、おも



ふま、に鎌倉殿に給事をいたし、折を窺ひて、頼朝を刺殺し、亡君親族  
の冤を雪めて、義高を世に出し進らすべう思ひしかば、営中に参り仕るに  
及で、ますへ万事に心を用、信やかに言行ふ程に、

(『怪鼠伝』巻之三第六套)

以上、唐糸が頼朝への敵討ちを決心するに至る契機を確認した。『怪鼠伝』における唐糸と頼朝との関係をまとめると、唐糸にとって頼朝は、君（木曾義仲）の敵であり、夫（手塚太郎光盛）の敵であり、兄（今井四郎兼平）の敵であり、子（大太郎）の敵であり、夫の甥夫婦（宇野小太郎行氏、棧橋）の敵なのである。唐糸には、義高と同様に、否、それ以上に、頼朝を討たなければならない理由があるということになる。また、義高が敵討ちに成功することは唐糸自身の敵を討つことにもなるのである。

#### 四

頼朝への敵討ちが失敗して投獄される唐糸の物語を描いた作品である御伽草子『唐糸草紙』の梗概を簡略に記すと次のようになる。

木曾の侍手塚太郎金刺光盛の娘唐糸は、義仲から頼朝の刺殺を託される。しかし、その計画が発覚し、唐糸は投獄される。唐糸の娘万寿は、母を助けるために鎌倉に入り、頼朝の座敷で今様を歌う。その歌に感動した頼朝は万寿に願いを尋ねる。万寿は自分の命と母唐糸の命を引き替えにすることを懇願する。さらに感動した頼朝は数々の宝を賜り、母と娘を共に国へ帰らせる。

このように、『唐糸草紙』は唐糸の娘万寿を主人公とする孝行物語である。唐糸が投獄された原因は、頼朝刺殺の計画が発覚したためであり、その計画の下敷きには主君義仲への「忠」と父光盛への「孝」の志がある。特に光盛への「孝」は、唐糸が義仲に送った書簡を通じて「この度のよろこびには、父の手塚に越後信濃を下されよ」と要請したことと、それに対する義仲の次の返事に表れている。

唐糸、それにて頼朝が命を取るならば、関東八か国を父の手塚に取らせ、  
天が下の副将軍となさうずるなり。唐糸をば、義仲が御台になすべし。も  
しまた、露の命を失はば、父の恩に報ぜよかし。このこと人に知らすな。

(『唐糸草紙』<sup>⑪</sup>)

義仲は唐糸が自らの命と父の栄誉を引き換えにすることによって言及しており、唐糸の決断の背景には父手塚への孝心があったと考えられるのである。頼朝の命を取る計画が成功すれば、それは唐糸にとって父への恩返しとなり、「孝」となるのである。

ところで、手塚太郎光盛と唐糸の関係について、『怪鼠伝』の本文中に次のような馬琴の言辞がある。

鎌倉志に云、「相伝ふ。唐糸は、手塚太郎が女なり。」〈一説に光盛が妻と云。未詳〉(中略)今按ずるに、唐糸が事、東鑑、盛衰記に載せず。只口碑に伝るのみ。こゝをもて、その説区々にして詳かならず。女流の刺客は、和漢に罕なり。

(『怪鼠伝』 卷之五第十一套)

『鎌倉志』とは、貞享二年に刊行された地誌『新編鎌倉志』のことを指すが、馬琴は同書の以下の箇所から引用している。

○唐糸土籠 唐糸土籠ハ、釋迦堂ガ谷ノ南ニ巖窟アリ。唐糸籠ト云傳フ。  
内ニ石塔數多アリ。相傳フ。唐糸ハ、手塚ノ太郎光盛ガ女ナリ。頼朝ニ仕  
ヘ居ケルガ、木曾義仲ヘ内通シテ、頼朝ヲ殺サン爲ニ、脇指ヲ懷中ニ隠置  
ケリ。遂ニ露レテ此ノ土ノ籠ニ入置レケルトナン。東御門ノ山ノ上ニモ、  
唐糸ガ土ノ籠ト云所ロアリ。然レドモ非ナリト云フ。

(『新編鎌倉志』 卷之二<sup>⑫</sup>)

『鎌倉志』では唐糸を光盛の娘としていることが確認できるが、馬琴はさらに註を付け、「一説に光盛が妻と云」としている。

唐糸を巡る物語に森島中良の読本『風草紙』がある。この作品は全九話の短編物語を集めた読本作品であり、その第一話「満珠が至孝母の禁獄を遁れしむる話」が唐糸とその娘満珠の物語である。この作品において注目すべき点は、手塚太郎光盛と唐糸の関係である。次は『風草紙』における唐糸を紹介する箇所である。

爰に鎌倉殿に宮仕へする、唐糸といへる女房あり。実は信濃の国の住人、  
手塚太郎光盛が妻なりしが、（『風草紙』 卷之一<sup>⑬</sup>）

ここで唐糸は光盛の妻と紹介されており、『怪鼠伝』が刊行される前に、既に唐糸と光盛の関係が夫婦として設定された文献が存在していたことが確認できる。

『唐糸草紙』における光盛は唐糸の父であるが、『風草紙』と『怪鼠伝』における光盛は唐糸の夫である。『怪鼠伝』では、唐糸を光盛の妻に設定することで、頼朝は父の敵ではなく夫の敵になった。『風草紙』では、唐糸の夫に対する言葉は、両者が夫婦であるにもかかわらず、光盛から金刺という短刀を送られてきた時の「主夫の大事とあらば、刺通しまゐらすは安かりなん」という独り言のみである。しかし、『怪鼠伝』においては、頼朝が夫光盛の敵であること、その怨みのため敵討ちを試みるということに再三言及されており、『風草紙』に比べて夫に対する「貞」が強調されているのである。

なお『怪鼠伝』には、唐糸の他にも「貞」を重要視する人物が登場する。頼朝の娘である大姫は、人質として鎌倉にいる義高と夫婦の縁を結んでいる。『吾妻鏡』には、大姫は義高の死を知り悲しんだ挙げ句、病気を得たと記されている<sup>⑭</sup>。『吾妻鏡』における大姫の記事は数少なく、義高の逃亡を手伝うという記事や、義高の死後に病を得るという記事があり、大姫は夫に対する貞心の

強い女性として記されている。『怪鼠伝』における大姫も義高への貞心を大切に思う女性である。義高は頼朝への敵討ちのため、大姫に頼朝の居場所を聞き出そうとするが、大姫は父である頼朝に対する「孝」と夫である義高に対する「貞」とのどちらを選択すればよいか悩む。結局、「親子の恩義重ければ、一トたびは推辞侍りしが、婦のうへには天に譬し、夫に思ひかゆるものなし」（『怪鼠伝』巻之八第十八套）と言い、義高に頼朝の居場所を教えることで「貞」を選択するのである。

『怪鼠伝』の唐糸は真の義高が登場した後、石田太郎為久の親戚と偽り鎌倉へ向かい、義高を思い尼になろうとしている大姫の側近く仕えることになる。大姫が尼になろうとするのは、亡くなった義高（実は、亡くなったのは唐糸の息子である大太郎であって、真の義高は生きている）の菩提を弔うためである。これは大姫が義高の死によって病を得るという『吾妻鏡』の記事を基にした設定である。つまり、大姫は『怪鼠伝』において、義高への「貞」を最も明確に体现する人物なのである。

『唐糸草紙』と『風草紙』では、万寿（『風草紙』では満珠）が母である唐糸を救おうとする行動が、話の中心となっている。万寿の孝心が頼朝にも伝わり、結局唐糸と万寿は褒美までもらって帰郷するのである。唐糸は頼朝を討つために鎌倉入りをするのであるが、その後投獄され、万寿が助けてくれるのを待つことしかできない弱い存在である。

一方、『怪鼠伝』の唐糸は自ら計略を立て義高を危機から救い、敵将を欺いで鎌倉入りをし、頼朝への敵討ちが失敗して投獄される。だが、その後も、頼朝への敵討ちを果たそうとする一念から、大姫を説得しようとしたりしている。唐糸自らの力で最後まで敵討ちを成就しようとしている点など、『唐糸草紙』や『風草紙』で描かれた唐糸に比べて、『怪鼠伝』の唐糸は格段に強い存在となっているのである。息子である大太郎を犠牲にまでして義高を危機から救う唐糸の姿は、玉山と春水が、『外題鑑』において唐糸を「烈女」と讃えたことを想起させる。

『怪鼠伝』より後の作品であるが、馬琴の代表作『南総里見八犬伝』には「七烈女」という言葉が見える。

またしちれつちよ はまぢ めい めうしん おとね ひくて ひとよ ひなぎぬ ふせひめとも はつけんぢよ  
又七烈女〈浜路、沼蘭、妙真、音音、曳手、単節、雛衣。伏姫共に八犬女  
とす〉の皆薄命なりし縁由、及八犬士の身の痣の形、牡丹花に似たるよし  
も、第九輯に至て分解せん。

(『八犬伝』第八輯卷之八下套、第九十一回<sup>⑮</sup>)

八犬士に並ぶ八犬女のうち、伏姫を除いた七人を七烈女と記している。「烈女」とは、節操が固く気性の強い女性のことを指す言葉であり、犬塚信乃の許婚である浜路をはじめ、犬田小文吾の妹でありながら犬江親兵衛の母である沼蘭、犬江親兵衛の祖母である妙真、犬江親兵衛を育てる音音と曳手・単節姉妹、そして犬村大角の妻である雛衣、以上の七人を、馬琴は「烈女」と呼んでいる。

この七烈女の中でも、浜路と雛衣は「貞」のために命を落とす、とりわけ節操の固い女性として描かれている。例えば浜路は、信乃に対する貞心から、別の男との結婚前に自殺を図ったり、死ぬ間際にも村雨丸を信乃へ届けて欲しいと言ったりしている。また雛衣も、その貞心から、夫である大角を自らの死をもって救っている。「烈女」には、「貞」の女性という一面が、確かにあるのである。

『怪鼠伝』の構想の基底にある主要徳目は、従来の研究で言われているように、「孝」と「忠」であることは否定できない。『怪鼠伝』の主人公は義高であり、また頼豪阿闍梨である。頼豪阿闍梨の鼠の術を授かった義高の活躍が、本作品の中核となっていることは確かである。義高が敵討ちに挑むのは、父である義仲への「孝」のためであり、唐糸が息子を犠牲にするのは、義仲・義高父子への「忠」のためである。しかし、それに加えて物語の終盤部では「貞」が強調されていることを見落してはならない。「烈女」である唐糸を光盛の妻と設定し、彼女を大姫の近くで仕えさせ、大姫に「孝」よりも「貞」を優先する

ように説得するなど、「貞」の徳目を強く押し出している。「貞」は、『怪鼠伝』の構想を支える、もう一つの重要な徳目であると言えるのである。

【注】

- ①「又同年（筆者注一文化五年）の冬十一月、大阪大西の芝居にて、頼豪阿闍梨怪鼠伝を狂言にとり組たる。名題は軍法富士見西行、左右の割名題は頼豪法師ノ怪鼠ノ咒云云、西行法師ノ閑談ノ猫云云と録したり」（『近世物之本江戸作者部類』）。
- ②「美妙水冠者義高」は、『頼豪阿闍梨怪鼠伝』における表記である。『平家物語』では「清水の冠者義重」、『吾妻鏡』では「志水冠者」と記されている。
- ③石川秀巳『『頼豪阿闍梨怪鼠伝』論序説——稗史的世界の基底——』（『山形短期大学紀要』第十八集、1986）、同『『頼豪阿闍梨怪鼠伝』論——稗史的世界の構造——』（『読本研究』初輯、1987）。
- ④「評に曰、この段軍記の古実をうしなはずして、密に許多脚色を説出し來たる。所謂義仲北方子の方より發りて、鼠の祠を祭り、光隆南方花洛にあつて、金の猫を贈り、竟猫鼠の冤を締に至る事、是一部の楔子なり」（『怪鼠伝』巻之一第三套）。
- ⑤木村黙老と馬琴合評の『増補稗史外題鑑批評』で、馬琴は『外題鑑』という両面摺りの一枚物があると記しており、横山邦治氏は「解題」（『為永春水編（増補）外題鑑』和泉書院影印叢刊 49、和泉書院、1985）において、この一枚物は東京都立中央図書館の加賀文庫所蔵の一楊軒玉山撰『〈画像ノ稗史〉外題鑑』を指すものであると指摘している。
- ⑥『著作堂旧作略自評摘要』の本文は、神谷勝広・早川由美編『馬琴の自作批評——石水博物館蔵『著作堂旧作略自評摘要』——』（汲古書院、2013）に拠る。
- ⑦『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の本文は、早稲田大学図書館古典籍総合データベース（請求記号：ヘ13 00198）に拠る。
- ⑧『俊寛僧都嶋物語』の本文は、早稲田大学図書館古典籍総合データベース（請求記号：ヘ13 00179）に拠る。
- ⑨石川秀巳『『頼豪阿闍梨怪鼠伝』論——稗史的世界の構造——』（『読本研究』初輯、一九八七）。
- ⑩「義仲は石田為久に撃れしかば、忽地望を失ひて、いよ、世の中を形なくおぼえ、遺恨やるかたなきに自殺せばやと思ひしが、また思ふやう、我身幸なくして仇を他人に撃するとも、その子義高、今なほ鎌倉にありと聞く。縦義仲は撃ずとも、その子を撃ば志をいたすに庶し」（『怪鼠伝』巻之一第三套）。正忠と光実、敵義仲の代わりにその子義高を敵討ちの対象にしている。この箇所をもって、『怪鼠伝』における第二の敵討ち物語が始まるのである。
- ⑪『唐糸草紙』の本文は、『御伽草子集』（日本古典文学全集 36、小学館、1974）に拠る。
- ⑫『新編鎌倉志』の本文は、早稲田大学図書館古典籍総合データベース（請求記号：ル 04 04202）に拠る。
- ⑬『風草紙』の本文は、『森島中良集』（叢書江戸文庫 32、国書刊行会、1994）に拠る。
- ⑭「廿六日、甲午、堀藤次親家の郎従、藤内光澄飯参す。入間河原に於て、志水冠者を誅するの由之を申す。此事密儀たりと雖も、姫公已に漏聞かしめ給ひ、愁歎の餘漿水を断たしめ給ふ。理運と謂ひつ可し。御臺所、又彼の御心中を察するに依りて、御哀傷殊に太し。然る間、殿中の男女、多く以て歎色を含むと云々」（『吾妻鏡』巻第三、元暦元年四月小二十六日）。
- ⑮『南総里見八犬伝』の本文は、東京大学総合図書館所蔵の初版本に拠る。

## \* 討論要旨

入口敦志氏は、本作品のキーワードが〈忠〉と〈孝〉であることについて賛同された上で、唐糸の行為が〈忠〉に当たることは馬琴も意識して書いたのだろうが、たとえば『三綱行実』に見られるように、近世初期とそれ以前には女性に対して〈忠〉という言葉で評価するのはあり得なかったから、これは近世後期読本独自の斬新な視点であり、だからこそ唐糸に注目する意味が出てくる、女性に〈忠〉という言葉で評価を与えるという点が非常に斬新でないかと提言した。これに対して発表者は、女性に対して〈忠〉という徳目を与えるのはたしかに斬新なことである。しかし、馬琴は〈忠〉と規定して言及してはいないが、唐糸に対して肯定的評価を与えられなかったことを後悔していたので、やはり彼女に〈忠〉という理念があるのではないかと考える、と答えた。また、大高洋司氏は『怪鼠伝』の主人公は義高であり、頼豪阿闍梨である」との読みについて、頼豪阿闍梨の術を破って義高をほろぼす役割を果たす金の猫についてはどのように考えるか質問した。それについて発表者は、『怪鼠伝』において大きく扱われている義高の敵討ちがあってこそ金の猫で義高の鼠の術を破るという話も生きると思うので、義高が第一の主人公でないかと考えるが、指摘の通り、金の猫を使う光実などの話も物語の重要な位置を示すものだと思う、と答えた。